

# ちいさい おふねの ぼうけん

マリーナ・アロムシタム    ぶん  
ヴィクトリヤ・セムイキナ    え  
ふじわら じゅんこ    やく





ちいさな みずたまりに  
ちいさな かみの おふねが うかんでいました。  
さやさや かぜが ふくたびに、  
みずたまりに さざなみが たちます。  
そこで おふねは  
ふかりふかりと たのしく ゆられていました。





まんまる めだまの カエルが にひき、  
きしから おふねを みていました。  
「ケロ！ ケロケロ！ ケロケロケロ！」  
と いっぴきが いうと、  
「ケロケケ、ケロケケ」  
と もういっぴきが こたえます。  
カエルの ことばで こう いったのです。  
「みて！ あれは なあに？ どこから きたのかしら？」  
「また にんげんが ゴミを なげこんだのさ。」  
それを きいて、おふねが いいました。  
「ほくは おふねだよ。たびに いっておいでって、  
みずに うかべてもらったんだ。」  
でも、カエルたちは きょとんとしています。  
「ケロケロ、おふねだって？ ケロ、いったい どこが？  
ケロケロ、どうして おまえが おふねなんだよ？」  
「どうしてかって？ みずの うえを すすむからさ！」  
おふねは みずたまりの はしから はしへ、  
すいーっと すすんでみせました。  
「ケロケロ、なら わたしも おふねよ！」  
「ケロケロ、ほくも おふねだ！」  
カエルたちは ほちゃんほちゃんと みずに とびこみ、  
しぶきを あげて およぎはじめました。







そこへ、はいいろガモが とんできました。

「グワッ グワッ、あんたたち なにしてるの？」

「カモさん、こんにちは！」

カエルは そう いいながら、ようじんして ちょっと あとずさりしました。

「ケロケロ、ほら こいつが じぶんは おふねだって いうんです。」

「グワッ グワッ！ あたしは ずっと まえに、  
みなみの くにて ふねを みたことが あるわ。

ほんものの ふねよ。うみに うかんでいたわ。」

「うみって なんですか？」

おふねの むねが ときどきしはじめました。

「グワッ グワッ。いっぱい みずが あるところよ。」

「ここよりも たくさん？」

カエルは おどろきました。





「グワッ グワッ! うみには たっくさん みずが あって、それが とおくで そらと つながってるの。」

ほくも ほんものの ふねに なりたい、ぜったい なるんだ!  
かみの おふねは そう ころろに つよく きめました。  
「カエルさん さようなら! ほくは うみに いくよ!」







でも カエルは だんだん おくれて みえなくなりました。  
おふねは ひとりで すすんでいきました。

みずたまりから ちょろちょろ おがわが ながれでていました。  
おふねは その おがわを すすんでいきました。  
カエルも おふねに つづきます。  
「ほくたちだってさ、ケロケロ、おふねなんだから！」